

〔講演要旨〕『谷陵記』の記載、および寺社被害史料からみた

宝永地震津波(1707)による高知県での浸水状況

都司嘉宣(建築研)・今井健太郎(東北大)・村上嘉謙(関西電力)

宝永4年10月4日(1707年10月28日)に、東海沖、および南海沖の海域の連動型巨大地震となって起きた宝永地震は関東地方から九州までの沿岸に大きな津波被害をもたらした。ことに土佐国(高知県)の海岸では、海岸に大きな津波被害をもたらした。今村(1941)、羽鳥(1978,1981)、都司ら(1994)、村上仁士ら(1994,1996など)によって、史料に記録された浸水到達点の記載や、伝承に基づいて高知県の沿岸各地で浸水標高の測定が行われた。これらの成果は、当然のことながら浸水点の記録のある場所を測定した成果である。

ところが、土佐国にあって、藩士・奥宮正明によって被災直後の時期に、土佐国の海岸にある合計208ヶ所の集落について、被害状況を克明に記録された『谷陵記』(『増訂大日本地震史料・II』、p104-119)の記載は、以上の調査研究にあまり参考とはされてこなかった。いうまでもなく、この文献は宝永地震の津波に関する最も信頼性の高い、最重要な文献であることは言うまでもない。それではなぜ、これまでの調査研究でこの文献が余り参照されなかったのでしょうか？それは、この文献には多くの集落について単に「亡所」と記載されているのみで、そこにあった集落が津波で壊滅・消滅したことはわかって、海水到達点の記載が明記されていないため、現地で測量目標とすべき地点が確定しがたかったからであろう。しかしながらこの文献には、「潮は山まで」とか、「潮は田丁(水田の意味)三ヶまで」などの記載がある。これらの記載は、やや精度は劣っていても、測定可能な情報を含んでいる。すなわち、「山まで」とは、市街地や水田地の背後の、山の斜面が始まる場所であり、後者のような記録は、その集落に属する水田の三分之一が浸水したという記録である。このような記載の集落を数えると124ヶ所に達する。さらに、単に「亡所」とある63ヶ所の集落については、少なくともその集落の敷地標高プラス3m以上の浸水高であったことを示している(東日本大震災の亡所

事例を参照した)。これも、津波浸水標高の下限の数値だけは推定しうることになる。

高知県では幕末に刊行された地誌である『南路志』(新収史料Ⅲ別巻、p435-442)に寺院・神社の変遷に関する多数の記事が載せられている。また明治期の『神社明細帳』(同、p463-479)にも、流失、破損を受けた神社の消息を伝えている。安全の地を求めて移転した神社の記事も多数含まれており、これらの記事も法律波の浸水範囲や浸水高さを推定する手がかりを与える。

本研究では、先行研究ではほとんど取り上げられることのなかったこのような記事をデータベース化した。これらのうち、18点については2012年7月末までに、現地を訪れ測量作業を行った。現地を訪れる機会の得られなかった点は、2万5千分の一地図によっておよその標高を推定した。

以上の結果、宝永地震津波の浸水標高の分布を図1に示す。

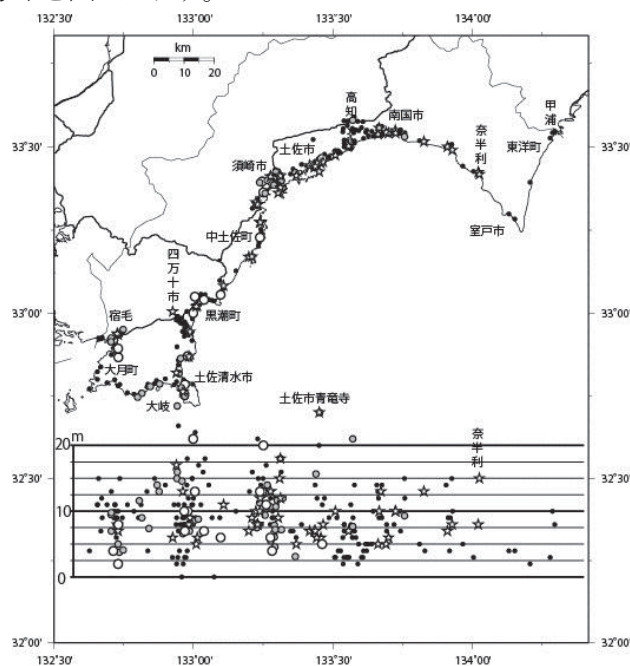


図1 宝永地震の津波遡上・浸水高分布 薄墨の円は先行研究の成果。☆は寺院神社記録によるもの。○は今回新たに現地測定した場所、小円「●」は二万五千分の一地図で図上測量で推定した場所。